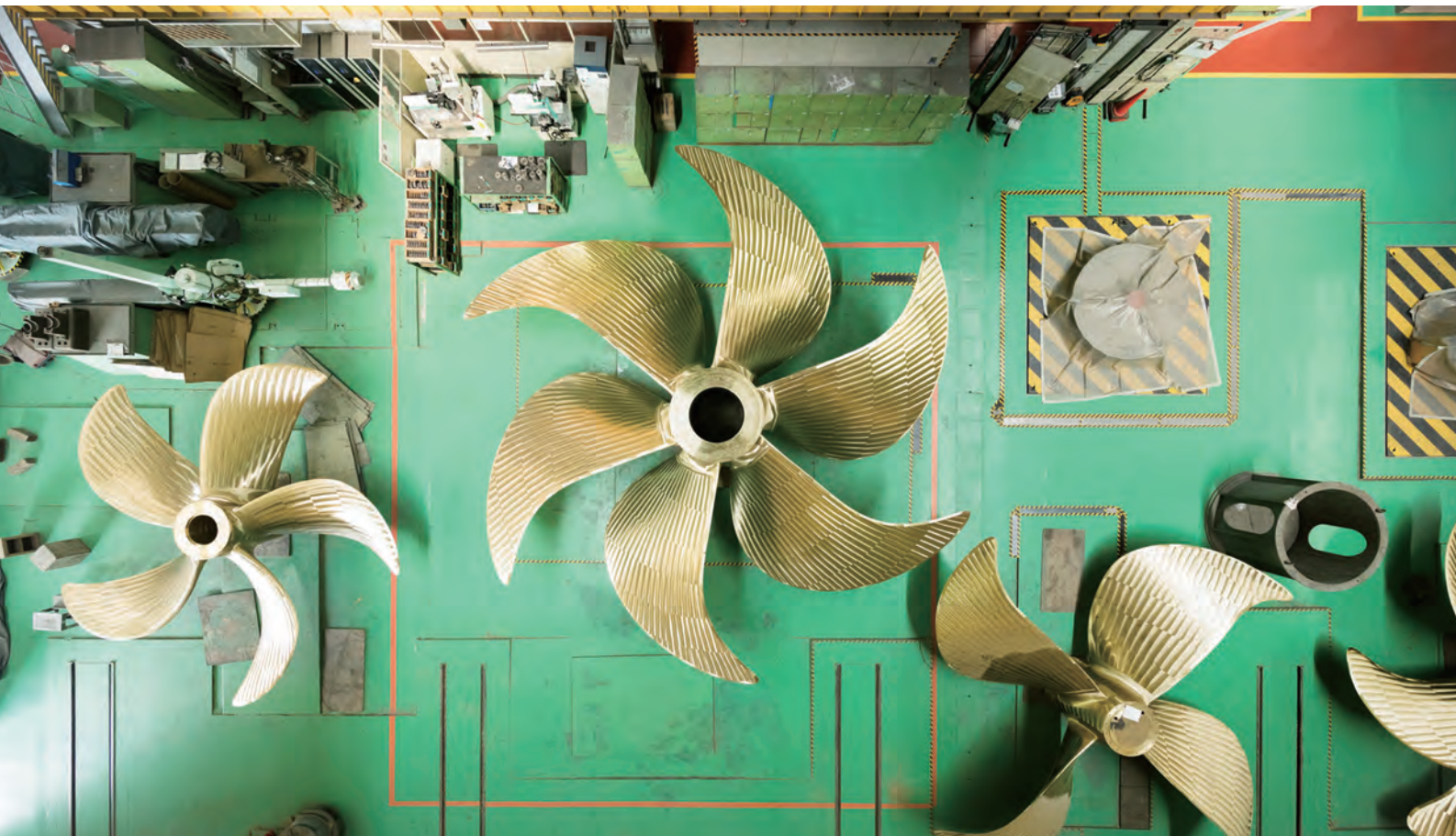


Propelling

Issue 7 特別号「玉島は5000基のその先へ」



玉島の物語はナカシマの挑戦の結晶

■ 大形プロペラに特化しながら、操業開始13年目にして累計5000基製造を達成
— その前例のない速さ・生産性の高さが世界を驚かせた。

物語の始まりは2005年、ナカシマの本社工場の機能は限界に達しつつあり、新工場の建設は喫緊の課題だった。ただ、必要な設備投資が当時の年間売上の9割近くにのぼる玉島への新設には、全役員が躊躇していた。しかし中島基善社長は、製造力の要となる新しい翼面加工機導入のタイミングも重なったこの時を逃せぬ好機ととらえ、英断を下した。

建設を任された製造部次長(当時)の河合康裕氏は、企画・設計から竣工までわずか1年あまりという過酷な日程をクリアし、翌06年に工場は完成した。

それを待っていたかのように、世界的造船ブームが到来する。年々急増していく受注をこなし玉島工場は、日本の造船業の救世主ともなったのだった。

ブームが11年にピークを越えた後も、力を世界に知らしめた玉島の、年間400基に及ぶ生産ペースは緩むことなく、5000基目のプロペラを送り出した今日に続い

ている。このような玉島工場には、河合氏から佐原氏、堂園氏に受け継がれた心意気が、ありありと見てとれる(次ページに佐原氏・堂園氏の記事掲載)。

工場内は、無駄な動線のない、直線的でコンパクトなレイアウトを実現している。各種工作機器は、現場のアイデアをふんだんに取り入れてプロペラ製造に特化したものを、メーカーと共同開発(3件の特許取得)。NC加工機は、設計データをCAD・CAMのプロセスを経ずに直接取り込むことができ、作業時間を大幅に短縮する。

一方、ミクロン単位の仕上げが重要な意味を持つ研磨の工程には、熟練した職人の手作業を残し、究極の品質も同時に実現している。

受け継ぐべきものと革新すべきもの、そのいずれにおいてもナカシマは、高みを極めるチャレンジ精神を示し続けてきた。それがひとつの形に結実した場所が、玉島工場なのである。■

Propelling は、陽のあたらぬ船底でその一生を送るプロペラが秘めるメッセージに光をあてて、世界の船そして船とともにある世界を未来へと一歩進める岡山発・日本発のかわらばん

Nakashima People Vol.7

佐原 慎太郎 (写真・右) ナカシマプロペラ 製造本部 玉島工場 プロペラ製造部長

他社から中途入社して2年目に玉島工場立ち上げメンバーに加わった佐原氏は、主に鑄造部門をまとめ、現在は工場全体を統括している。数々の苦境で発揮された玉島スタッフの団結力の源ともいえる存在だ。

Q 5000基達成の節目に思うことは？

A 特別なものではなく、毎日の繰り返しの中の「通過点」だと。もちろん喜びはあるけれど、危機感も大きい。でも、そこから生まれる次の行動が未来のナカシマをつくるのだと思います。

先人が築いてきたものを維持・継続するためには、それを守ろうとするのではなく、彼ら以上の新たな仕掛けを重ねていかなければなりません。大切なのは、将来の姿を思い描いて、そこから逆算して、今何をすればいいかを考えること。そして、新しいことをやろうと思ったら、代わりに何かをやめる勇気も必要です。

Q 佐原さんの描く将来とは？

A 今の当たり前が、当たり前でなくなる。例えば鑄造は、必要資材の調達など、近い将来これまでのやり方では難しくなることがわかっています。また、危険を伴う作業を中心に、製造工程が自動化・ロボット化されていく流れは必然でしょう。

熟練した職人たちの技術は、創業から100年の継承・練磨を経て、容易に真似のできない「技能」の域に達していますが、だからこそ、これをデータ化し、あらためて「技術」として玉島工場全体で継承していくことも重要だと考えています。

最先端技術と伝統の技を高いレベルで併せ持ち、それらを融合させる——守るものは守り、手放すものは手放し、新しいものを生み出すという、決して容易でないこの営みと、ナカシマはこれからも真摯に向き合い続けます。

Q これから玉島をどう率いていく？

A 次世代を育てることが、やはり今一番にやるべきことでしょう。取り組むべきイノベーションを描き、現場をまとめる人間は、AIやロボットに置き換えることはできま

せんから。

工場の運営の理想は、実はスピードスケートの「バシユート」のスタイルかと。トップのひとりがすべてを背負うのではなく、リーダーシップをとれる数人がチームを組んで、その時最適なひとりが先頭に立ち、状況や対応すべき課題が変わればまた最適なひとりに交代する。リフレッシュを繰り返しながら、ゴールのないゴールに向かって着実に周回を続けていけたらと考えています。 ■



堂 蘭 英 朗 (写真・左) ナカシマプロペラ 製造本部 生産管理部長

玉島工場立ち上げの中心メンバーで、主に機械・仕上加工の工程を統括してきた堂蘭氏。現在は、フィリピン工場、ベトナム工場を含むグループ工場全体の生産管理を担う。

Q 5000基達成の節目に思うことは？

A 数字は、納期に遅れることなくお客様の多様なニーズに応えるなど、「ナカシマの当たり前」を一心に追求し続けてきた結果の積み重ね。そして、ここまで玉島工場を突き動かしてきた心意気は、グループの海外

工場にも受け継がれています。これから、それぞれの場所で確かな足跡を残していくことになるのでしょう。

Q 玉島工場の製造力を支えるものとは？

A 工場のレイアウトや加工機・計測器といったハード面の独自性に加え、玉島は当初からIoTを活用する生産システムを構築してきました。過去の製造データが蓄積されており、同種のプロペラを受注した時は、必要な副資材の在庫に至るまで直ちに確認して、納期を迅速に判断できます。

このように「ものづくり」の最先端を走る一方で、その原点につながるスピリットも、従業員の間には受け継がれています。この点では、ナカシマが創業以来伝え守ってきた鑄造という工程の、「無」から「有」が生まれる神聖ともいえる瞬間を、ここで共有できていることが大きいと感じます。

Q ナカシマの強みとは？

A この玉島工場の建設に象徴されるように、ナカシマの先人たちは、新しい機器や設備の導入に、通常では考えられないようなユニークかつ大胆な投資をしてきましたし、そうしたチャレンジを社員にも許す文化がこの会社にはあると思います。次の世代もまたチャレンジできる土壌をつくるのが、私たちの仕事だと考えています。

故・中島保名誉会長は、「ボタンを押したらプロペラができてくる」のが理想と言っていましたが、その「夢」に少しでも近づけるよう、一歩先のことを考え続けるのが私自身のチャレンジなのかなと思います。

Q. この先の継続・発展のカギは？

A お客様のニーズも多様化しているこの時代には、ちょうど映画「アベンジャーズ」シリーズに出てくるヒーローたちのように、高い専門性とリーダーシップを併せ持つ人材がひしめく組織をつくっていく必要があると思います。

ナカシマは、国境も越えてそれぞれのスキルをうまく生かせる会社になってきていると感じています。その多様性を新たな強みにしていくことが、発展のひとつのカギになるのでしょうか。 ■



5000基のその先へ トップ・メッセージ

パートナーシップが拓く船の未来

中島 基善 ナカシマプロペラ 代表取締役社長



「良いものを、安く」という高度成長期以来の合言葉は、ものづくりをする会社にとってひとつの戦術ではあっても、使命ではないと考えています。そして、転換が加速するこの時代に、一企業がすべてを自前でやることは難しく、またその必要もないでしょう。

世界を視野に、同じ方向を見据える「仲間」をいろいろな分野でつくって自らの使命を果たすことにこそ、私たちは挑んでいくべきだと思います。

むろん、世界に冠たるものがないと対等なパートナーにはな

れない。幸い、船の自動化・AI化が進むほど、「指令」をいかに効率的に推進力に換えるかが重要になります。そこでは、「ものづくり」を独自の視点でとらえて設計力を重視し、蓄積してきた推進性能の最適化に関わるナカシマのノウハウが、世界の仲間との協働を通して船舶・海の未来に役立っていくことでしょう。

行動しなければ、チャンスはどんどん通り過ぎてしまいます。これからも、失敗を恐れず、果敢にチャレンジし続けるナカシマでありたいと思っています。 ■



岡山から
日本から
世界の船と、船とともにある世界を
一歩先へ
いまの延長線上にはない未来に
舵を切る

■ 展示会情報

- METSTRADE [オランダ] …2019年11月19日～21日
- MARINTEC CHINA [中国] …2019年12月3日～6日
- INTERNATIONAL WORKBOAT SHOW [アメリカ] …2019年12月4日～6日
- SEA JAPAN [日本] …2020年3月11日～13日
- ASIA PACIFIC MARITIME [シンガポール] …2020年3月18日～20日

ナカシマプロペラ 株式会社

〒709-0625
岡山県岡山市東区上道北方 688-1
086-279-5111
npcwebmaster@nakashima.co.jp
<https://propelling.jp/jp>
Japan・Singapore・Vietnam・Philippines・China
Korea・Taiwan・USA・Brazil・Turkey・UK・Namibia・UAE